さ・ゆ・り……

せりもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さ・ゆ・り……

【Ｎコード】
Ｎ５１３１Ｖ

【作者名】
せりもも

【あらすじ】
恐ろしくも、うつくしい話を書きたいと思いました。
物語でありながら、一遍の詩のような……。
平安朝が舞台の、和風ファンタジーホラーです。

ばばさま。大変！
男が。
さゆりを訪ねて、男が参りました……。

なんと。
ばばさまのお手引きとは。
いったい、何をお考えです。
さゆりは、まだ、つきのものも見ない、子どもなのですぞ。

そう……。三月も前に。
いえ、知りませなんだ。
さゆりは、もう、子どもではなかったのですね。

ええ、ええ。
わかっております。
すべては、さゆりの幸せの為。
しかし。
あの男は、あまりにひどすぎるのでは？
だいたい、あのおつむりは、なんです。
烏帽子（えぼし）が、つるつるすべっておるではありませぬか。
……国司（こくし）？
ほう、羽振りはよろしいのですね。
しかし、年齢が、二回りほども違うておりまする。
それに、あの、脂ぎった、赤ら顔！
論外。
ありゃ、ただのヒヒじゃ。

なんですと？　別の男？
他にも、候補はあるとおっしゃるのか。
あの男が不実なら、床顕し（結婚を周囲に知らせること）をせずに、別の男を通わせると……。
そんな……。

ばばさま。そのような……。
確かに、ばばさまが、いつまでも、後見であられることは、叶いませぬでしょう。
二親を早くに亡くしたは、さゆりの不幸……。
よるべない、あわれな子です。
だからいっそう、妾も、さゆりに幸多かれと願うておりまする。
しかし。
そこいらの男に、さゆりを娶せると、おおせらるるのか？

気にくわぬ。
ばばさま。
御身もじゃ。

◆

おや。どこへ行ってしまったじゃろう。
さきほどまで、儂を案内してくれていた女の童は……。

なにやらけったいな屋敷じゃな。
やたらと廊が長い上に、半蔀が閉め切ってあるから、月の光も届かぬ暗さじゃ。
自分の鼻先も見えぬわい。
今宵、儂が来ることは、糸刀自も、ご存じであろうに。
なんと、愛想のない……。

うわっ。
……猫か。
ああ、驚いた。
危うく踏み殺すところじゃった。
これ、そのような目で、見るでない。
暗がりで、目ばかり光りおって。
おお、気味が悪い。
いやじゃ、いやじゃ。

……。
噂では、さゆりの君は、光り輝くほどの美形とか。
それに、まだ手つかずの純真無垢。
糸のばばさまと、昵懇(じっこん)のわしだからこそ、つかめ得た、この幸福。
ふふふ。
まったく、どのような味の良さであろうの。
これぞ、色好みの理想というもの。
そう思えば、この暗さも、屋敷の不気味さも、風情があろうというもの。

……。

しかしのう。
女の童(めのわらわ)はいなくなってしまうし、猫は出るし。
何やら、ちょっとばかり、うんざりしてきたのう。

おおっと。
足が、ぬるっと。
ありゃまあ、床板がぬるぬるするわい。
何か、こぼしたのか？

こう、暗くては、足元も見えぬ。

おう、御簾の向こうに、紙燭の灯が……。
人の気配……？
若い女ではないな。抹香臭い匂いがするわい。
してみると、ここは、糸刀自の、居所。
ちょうどよい。
この婿あしらいに、一言、文句をつけてやらねば。

糸殿。失礼つかまつるぞ。

おや、文机に向かっておられるのか？
向こうをむいて、うたたねか。
人を呼んでおいて、　いい気なものじゃの。
これ、糸殿。
礼を違えてはおられませぬか。
客人を回廊に置きっぱなし、しかも灯もなしときた。儂は今まで、このような非礼に出会うたことはございませぬぞ。
糸殿！
……ぴくりとも動かぬ。
年も年じゃ。よもや、ぽっくりいっておるのではあるまいな。
この年齢なら、遠慮はいらぬ。御簾の内に男が入っても、文句はなかろう。

どっこいしょ。
あれ、さっきの猫が、こんなところに。
おや、何か舐めていたようじゃ。口の周りが……。
紙燭の灯では、充分に見えぬな。
糸……ど、……。
うわあ。

うわうわ、うわあー。
く、く、く……。
くび、くび、くびが、ななな、な、な、な……。
ねこねこねこねこ！

ふふふ。

ばばさまのくび。千切れて飛んだ。
しらがの頭、遠くに跳(は)ねた。
灯の陰で、にゃあにゃが、なめる。
まあるい頭の、お首の切れ目を。

うふ。うふうふ。
うふふ。
ははははは、は、ははははは。
あーっはっはっはっは。

◆

さゆり。
ばばさまは、気の毒なことじゃったのう。
首が飛んで死ぬとは。
いったい、どのような因業(いんごう)なことをなされた罰か。
ああ。泣くでない。
ばばさまは、天のお星になって、さゆりのことを、いつまでも見守ってくれる筈。
……大丈夫じゃ。
妾(わらわ)は、さゆりから、離れはせぬ。
いつもいつも、さゆりのそばに居る。
さゆりの為に、ここにおる。

何奴！
垣の隙から覗いているのは。
この、不届き者！
見るな。
さゆりを、見るな！

……。
よいよい、さゆりを怒ったわけではない。
今、いたちのように去っていったであろう。
あの、野太い神経の男を、怒鳴ったのじゃ。

なんじゃ、あの白いものは……。
松が枝（え）に結ばれた、あの……。
いや。
さゆりが見ることはない。
穢（きたな）きものじゃ。目が汚れる。
向こうへお行き。
妾が、焼き捨ておこう。

……。

全く。
屋敷から、にじみ出るほどの、さゆりの美しさ。
下賤（げせん）の者どもが、気を惹（ひ）かれるのも、無理はない。
しかし、付文とは。
度し難い。わが身を省みぬ、無神経な男めが。
しかし、こうもやすやすと、さゆりを垣間見（かいまみ）されては、迷惑というもの。
ここはひとつ、見せしめが必要じゃな。

ま、せっかくの文じゃ。
その神経の図太さに免じて、読むくらいは読んでやろう。
どれどれ。

ぬばたまの夜をまばゆく照らす月さゆりの君や今宵(こよい)待つらん

ぷっ。
駄作。
決めた。
こいつじゃ。

◆

ああ、驚いた。
何やら、得も言われぬ光を、屋敷のうちに認めた途端、曇天(どんてん)にわかにかき曇(くも)り……。
ぴかり、どろろん、どかん
あれは、雷神であったろうか。
恐ろしい。恐ろしい。
やはり、かの女には、近づかぬ方が……。
いろいろ悪い噂もある。
しかし、ちらりと垣間(かいまみ)見た、あの、美しさ。
わが妻(め)どもは、足元にも及ばぬ。
月とすっぽん、天女と鬼女じゃ。
よく見えたわけではないが、ちらり、見るだけで、充分わかった。
知らなんだ。あのように、珠(たま)のごとく光り輝く女が、この世にあろうとは。
なぜ、あの美しい女が、わが妻ではないのか。
欲しい。

あの女が、どうしても欲しい。

なに？　さゆりの君から、返歌とな？

ゆめまぼろしではなかろうな。

今まで誰一人として、かの君から、そのようなものを贈られた者はないのだぞ。

さては、かの高慢な君も、それがしの魅力に、くらりときたか。

ほほ。

ほほほ。

どれ、見せてみい。

うむ、鶯色（うぐいす）の薄紙に、水茎（みずくき）のあとも鮮やかに、焚（た）き染められた香（こう）は……伽羅（きゃら）か。

これが、かの君の香なのか。

君来るとわがまつしたの小暗闇今宵（おぐらやみこよい）かけくるたちまちの月

好きものではないか。

確かに今宵は十七日、立って待つほどにすぐ、月が上る。それを、今宵駆けくるときた。

夜は長いに。

男が来るのが、待ち遠しいのだな。

松の樹の下で待つ、と。

さすれば、外で？

あの美しい君と。

うう。

楽しみじゃ。

◆

まったく。

わがあるじも、物好きが過ぎる。
色好みとか言うて通ぶっておられるが、すでに、ゲテモノの世界じゃ。
これが、まともな貴族の家なら、それがしも、あるじの用（ふふ、ふ）のすむまで、気の利いた女房（貴人に仕えている女性）の局（つぼね）に入り込み、思わぬ余禄（よろく）にあずかれようというもの。
しかし、あのような化け物屋敷では……。
あるじ殿とて、見た筈じゃ。
あの、雷の恐ろしきさま。
あれは、雷神の祟（たた）り。
それなのに、性懲りもなく、あの女のもとへ行かれるとは。
なにより、同行を命じられた、わが身の不幸……。
あっ。
あれは…？　ぴかりと。
あの、赤松の梢に。ほら、ぴかりぴかりと。
あるじ殿。いけませぬ。帰りましょう。
なにやら妙でございまする。
あるじ殿。あ、あるじどのっ！
ああっ。
お体がっ！
まるで、誰かにつままれたように、空中高く……。
誰か、だれかぁーっ。
おお。
お体が、くるくる回っておられる。わが頭上で、主殿のお体が、独楽（こま）回しのように……。
くるくる、くるくる。
くるくる、くるくる。
うわあ。
ち、千切れた。
あるじ殿の、手が。

足が。
あるじどのーっ！
なんだこれは。
ぼたり、ぼたりと。
上空から。
うわっ、目に入った。
生臭く、どす黒い、この、生温かい水は……。
血……。
あるじ殿の、千切れた体から落ちてきた、血。
ふうぅぅぅぅーっ。

……。
のびたか。
ひ弱な従者よのう。
今宵のことを、しっかり喧伝（けんでん）してもらおうと思うたのに、気絶とは。
頼りないことよ。このような者を召し使っていたとは、この男がかわいそうにも思えるな。
しもうた。
こやつの、名を聞いておくのを忘れた。
これでは、手足を千切った意味がない。
四肢と頭、胴体をばらばらにして、この国のあちこちにばらまこうと思っていたのだ。
きちんと名前を書いておかなけりゃ、誰の体の一部か、わかりゃしない。
従者は頼りないし、しもうたのう……。
顔も、すっかり面変わりしてしまったな。胴体からひねり取った途端、青黒くすぼんで、誰やらさっぱりわからん。
ほほ、はかないものよのう。

◆

「誰そ！　……なんだ。きつねか」
「ただのきつねではないぞ。白狐(びゃっこ)じゃ」
「きつねは、きつねじゃ。何用か」
「ちと、知りとうてのう。なにゆえ、汝は、さゆりに近づく男に祟(たた)るのか」
「ふん。けものにはわからぬ道理よ」
「けものの身として、知りたい。誰が誰とつごうても、かまわぬではないか」
「これだから、畜生は……。まあよい。さゆりに近づいてくるのは、ろくでもない男ばかりだからじゃ。わがめがねにかなわん。妾はただ、さゆりの幸せを願うておるのみじゃ」
「ろくでもない男でなければ、祟らぬのじゃな。さゆりに、幸を導く男であれば、汝は、引っ込むのじゃな」
「そんな男がおればな。さゆりに見合う男なぞ、おるものか」
「それじゃ、さゆりは、ずっと、独り寝か」
「妾がついておる」
「しかし、汝は……魔物に男も女もないか。じゃが、汝に、マラは、ないのう」
「こら。匂いを嗅ぐな」
「マラなくば、さゆりが、かわいそうではないか」
「そんなものなくてよい。さゆりには、わが能うる限りの幸せを授けた」
「なんじゃ、その幸せとは」
「……むかし語りじゃ。昔、妾(わらわ)がまだ、髑髏(どくろ)じゃった頃……」
「髑髏だと？　いつの話じゃ、それは」
「なに、ほんの一昔前のことよ。この身のしばし化野(あだしの)にありし時、わが右の眼窩(がんか)の下から、クマザサが生えて来よった。痛うて痛うて、たまらぬ。右目だけではない。頭全体が、割れるように痛むのじゃ。

畜生に、この苦しみがわかるか？」
「そもそも、頭が痛んだことがないからな」
「単純な奴よのう。うらやましいぞ。そこへの、まだほんの子どもだった、さゆりが来たのじゃ」
「化野（あだしの）へ、そんな子どもが、か？」
「糸ばあさんが、連れて来たのじゃ。あの婆は、変わり者じゃった」
「霊魂と話せるのだったな。そういえば、あの婆も、妙な死に方をしたな」
「こっちを見るな。だいぶ前の話じゃ」
「だいぶ前ねえ」
「続きを聞きとうはないのか」
「おう、聞きたい。聞きたいぞよ」
「……笹を抜いてくれと、妾は頼んだ。しかし、あの婆、知らぬふりをして、通り過ぎようとする。その袖を引いて、かわいそうじゃ、気の毒じゃと言うてくれたのが、さゆりじゃ。かの女は、わが苦痛を、取り除いてくれた。お礼にな。妾はさゆりに、わが持てる限りの美を授けた」
「さすれば、さゆりの、あの美貌は……」
「おうよ。わが呪（しゅ）よ。わが呪によりて、さゆりはかくまでうつくしいのじゃ」
「気の毒に……」
「気の毒？　何を言う。妾はさゆりに、わがあたうる限りの幸を……美を、授けた」
「うつくしいは、不幸じゃ。外見しか見てもらえんからな。魔物を助けたばかりに、気の毒な――」
「黙れ。黙れ黙れっ。さゆりは、わが造り出したるうつし世の珠、畢生（ひっせい）の傑作ぞ」
「わからぬな」
「きつねになど、わかってもらえなくともよいわ。往ね！　往ね！」
「さゆりはな、恋をしておるぞ」

「こ、恋、だと？」
「さよう。恋じゃ」
「けものといえど、嘘は許さぬぞ」
「ほ、怖、怖。嘘と思うなら、さゆりの文箱（ふばこ）をのぞいてみるがよい。螺鈿（らでん）を巻いた、百合の花模様のじゃ。やけどをしそうな恋文が、大事に大事に、仕舞われてあるからの」
「妾（わらわ）に内緒で……。い、いつの間に……」
「さゆりとて、魔物に報告の義務はなかろう。汝は、月のものが始まったのも、知らされなかったではないか」
「……」
「どうせ今度の男も、魔物のめがねに叶うまい。しかし、今回は、いつもと違う。なぜかわかるか？」
「わかりたくもない」
「さゆりの方から、仕掛けた恋だからじゃ」
「なに？　さゆりから？」
「やはり、マラの欠けた身では、不足ということよ」
「下品な。失せろ」
「かんら、からから。かんら、からから。かんら、……」
「笑うな。きつね、失せろ！」
「かんら、からから。かんら、からから。かんら、……」

◆

さゆり。どこへ行く？
寝てはおらぬぞ。妾（わらわ）は、眠ることはない。
ああ、わかっておる。あの男の元へ行くのだろう。
止めはせぬ。行きたければ行くがよい。
妾を置いて。
この暗く広い屋敷に、妾を一人残して。
……遠くから、牛車（ぎっしゃ）のきしみ。馬のいななき。

今宵、迎えに来るのだったね。
今のお前には、何を言っても無駄じゃ。
恋に目が曇っておる。
しかし、目が覚めた時には、遅いのじゃよ。もう、帰るところもない。
それでも、行くのだね。
……ばかな娘。
妾が褥に伏せっている間に、さあ、行ってしまうがよい。

◆

屋敷の奥のほの暗闇から、静けさの底を、そっと、爪の先で掻くように、衣擦れの音がする。
ああ、さゆりの君。
わが宝。
どんなに、この日を、待っていたことか。
さあ、こちらへ。
ご自分の意思で、門を出ていらっしゃい。庭に入り、牛車を階に近づけて、もしや、邪魔をする方がおられては、いけませぬ。
……本当は怖いのだ。この屋敷に入った男たちの何人が死に、何人が正気を失ったままでいることだろう。麿は、その轍を踏みとうない……。
さあ。さあ。門を出て……。
さゆりの君。さゆりの君。
お手を。
あなたのその、白魚のようなお手を……。
さあ。
……え？
これが、さゆりの君の、手？
乾いて固い、これが？

確かに白い、でも、かさりと……。
骨？
さゆりの……、
なんぢゃ。
煙が。怪しの……。
おおっ！
さゆりの君を、妖気が包んでおる。
ぎゃ、ぎゃ、ぎゃ、ぎゃ、
溶けとる、溶けとる、
さゆりの君が……。
女が、溶ける。
うわあっ。うわあっ。
肉が溶け、髪がちらばる。
眉がないっ。目玉が飛び出したっ。
やめてくれ、歯をひん剥(む)くのは。ああ、唇が線になり、糸になり……。
ぷっくりとした水けを含んだ、出盛りの桃のようだった頬は、……しゅーっと妖気を吐きだして、見る間にすぼんで……。

うわ、うわ、うわあっ。

どくろじゃあ。

寄るな。寄るなあっ。
そのような、汚らわしい身で、麿(まろ)に近寄るでない。
妖気の中へ、引きずり込むな。
あっちへ行け。この、もののけめ。
者ども、弓じゃ。魔よけの梓弓(あづさゆみ)を打ち鳴らせ。

わわわっ。

骨……。妖気の散った後には、骨しか残っとらん。
骨が、動く？
うわあ。
寄・る・なーっ！

ぎゃっ。
骨が弾けた！
ぱあんと。
頭骨が、背骨が、腰の骨が。
小さい骨は、とっくに散って、
うへえ。
口に入ったぞ。
骨のかけらが、麿（まろ）の口に……。

うわあ。
うわあ
うわあぁぁぁぁぁーーーーっ！

◆

いいざまじゃの。
男なんて、どれも同じじゃ。
頼りになぞ、ならんよ。平気で裏切る。
……遠い昔の、妾（わらわ）の男もそうじゃった。妾を、化野（あだしの）の、されこうべにした男……。
恋なぞ、するものではない。
本当に頼りになるのは、突き抜けた自分のうつくしさだけ。
それが、すべての拠り所になる。
それによって、生きていける。
わかったろう、さゆり。

一歩、屋敷の外へ出れば、こうなる。
わが呪(しゅ)なかりせば、お前は、形を結ぶことさえできはせぬ。
妾とお前が、初めて出逢うてから、それだけの時が、流れたのじゃよ。
……。
大丈夫じゃ。
お前がどんなに不実であったとしても、妾は、お前を見捨てたりはしない。
骨のかけらを拾い集めて、再び、さゆりを造り上げよう。
前のさゆりより、もっといっそう、うつくしく。
そうやって、さゆりは、どんどん、どんどん、うつくしくなってきた。
次のさゆりも、少しだけ、さゆりらしさを、残しておこう。
それが、いつの日か、妾(わらわ)を裏切り、妾は、退屈せずにすむ。

次は、何人の男を狂わすことができるかの。
殺すことが、できるか、の。
ふふふ。
楽しみじゃ。

（後書き）

お読みいただいて、ありがとうございました。
お愉しみいただけたでしょうか……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5131v/

さ・ゆ・り……

2011年8月14日03時33分発行